

日本の文学

久保田万太郎

聖見 彥



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE



日本の文学

28

中央公論社

久保田万太郎
里見 弴

昭和43年9月25日初版印刷

昭和43年10月5日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

久保田万太郎

末枯

7

雨空

41

春泥

57

市井人

145

うしろかげ

204

万太郎秀句

243

里見 淳

河豚

251

年譜	解説	注解	二人の作家	いろいろとこ	美事な醜聞	小暴君	縁談宴	椿	桐畑	或る年の初夏に
510	496	485	475	467	453	438	395	391	273	256

伊藤整

挿 口
画 絵

「椿」

石井 鶴三

「末枯」「春泥」「市井人」

「うしろかけ」

宮田 重雄

「或る年の初夏に」「桐畑」

「縁談寶」「小暴君」「いろ

おとこ」

田村 孝之介

久保田万太郎

末 枯

鈴むらさんのところへ、このごろ、扇朝せんちょうが始終はいりこんでいるという風説ふうせつを聞いてせん枝は心配した。何とかしなければいけないと思つた。だが、何とかしたいにも、一月あまりというものの、鈴むらさんは、まるでせん枝のところへ顔をみせなかった。来なければならぬはずのせん枝会の日にも、とうとう出て来なかった。

それでもないと思つて三橋さんきょうに聞くと、三橋も、まるでそのち会つていなかった。

「俺おれは先々月の晦日えいじつ、末広の独演会のかえりに川田さんや小山さんなんかと王秀たみひでへ行つたとききりだ。」と、三橋はいった。「旦那だんなはあれでなかなかの気まぐれだから。……大丈夫だよ、打捨うちすてつておけば、そのうちにまたさびしくなつて出て来るよ。」

「気まぐれは俺も知つてゐる。　　たから、出て来ないのはちつとも構かまわれないが、ただ少し、聞きこんだことが

あるから。」

「聞きこんだこと。……何を。」

「なあに、大したことじゃあないが、なんだかこのごろ扇朝せんちょうの奴やつがしきりに今戸いまどへはいりこむつていうからね。」

「扇朝。」三橋には分らなかつた。「何だい、扇朝せんちょうつていふのは。」

「以前あの梅橋ばいきょうのところで梅枝ばいしといつてた爺やさんさ。……

・去年の夏ごろ、よく俺のところへ来ていたから知つてゐるだろう。」

「ああ彼奴あいつか。……彼奴なら知つてゐる。　　たけど、

また、何だつて旦那だんながあんなものを。」

「会つてそれが聞きたいんだ。」せん枝はいった。「どんなものが立ちまわつたつていいけれど、彼奴はいけない。

彼奴だけはいけない。……彼奴は義理を知らない人間だから。」

間だから。」

「それには、旦那も、このごろ少したじれの形ちがあるからね。」

嘲あざわらけるように三橋はいった。

「たじれの形ちがあるから。　　たからいけない。」せん枝は嘆息するように、「人間、曲つたとなると、やつぱりイクンのないものた。」

このごろの鈴むらさんの、退屈な、救いのない、枯野のようなあけくれがいまさらのようにせん枝の胸に浮ん

だ。・ 蔭で、いろいろ、何のかのと勝手なことはいっ

ても、すこしも以前のことを思うと、やっぱり、せん枝は、暗い、但ぐましい心もちにならないわけに行かなかった。

せん枝が扇朝のことを「彼奴は義理を知らない。」というのには理由がある。

いわなければ分らないが、全体扇朝という男は、二代目の梅橋の弟子で、十二三の時分にすでもう別ヒラの真打だった。器用でもあったのだから、人間が親孝行だというので、ことのほか梅橋に目をかけられた。十四のとき、両親にわかれ、それからずっと梅橋の手もとに引き取られて、ゆくゆくは三代目梅橋にもなる位なつもりで修行をしているうち、十六のとき、根津の菊岡の衆屋で、平常から仲のよくなかった兄弟子に喧嘩をうられ腹の立ったまぎれそこにあった煙草盆を叩きつけて、相手に怪我をさせた。扇朝にしてみると、(その時分にはまだ扇朝とはいわなかったが)自分は大うられた喧嘩を買ったまでのこと、怪我はさせても、自分になんにも悪いところはない位に思っていたが、それが師匠の梅橋の耳にはいると、もつてのほかのこととさんざん小言をいわれた。・ 扇朝はまた腹が立った。師匠のまるで自分に好意を持つてくれないのにたまらなく腹が立った。

・ 勝手にしろとばかり、梅橋のところを飛びだして、そのまま東京の土地を離れた。明治二年の秋だった。

とにかく大阪まで行くつもりで、東海道に乗りだすと、藤沢で思いがけなく東京のある蟲眞のお客にあった。事情を話すと、そのお客が大へん同情して、そういうことなら当分俺が面倒をみてやろうといってくれた。大阪へ行きたいなら大阪へもやってやる。

悪いようにはしないから、何にしても俺と一しょに来たほうがいいといわれて、そのまま、そのお客について箱根から三島に入った。そうして三島に二月あまり逗留した。

たんたん、日のたつにつれて、扇朝は、やっぱり生まれた故郷が恋しくなった。それには懐の都合もよくなくて、いつまで草深いところにぐずぐずしていることがくだらなくなり、いい加減なことをいってそのお客の前はごまかし、即日、一人になって三島を出た。

真っ直ぐに東京へ入ればいい奴を、途中、横浜に寄つて、うっかり横浜の景氣に引つ翳かった。ちようどそれは開港当時。困つたら、どこかの寄席にたのんでつかつてもらえばいいと肚をきめ、半月ばかりふらふら遊んでいるうちに、ふとしたことから、ある女義太夫の一行の上置になつて、上総の東金のほうへすこしの間稼ぎに行く相談が出来た。

扇朝のつもりでは、大抵十日か十五日位で放免される

と思つていた。ところが、その東金の興行が莫迦^{ばか}なあたりかたをして、それがために、つついてその一行は、さらに安房^{あわ}の方をずっとまわつてあるくことになった。

方々まわつてあるいて、ちやうと勝浦のちかくのある村にかかったときだ。そこのある網主の娘に扇朝はすつかり思ひつかれた。ぜひとも簪^{かんざし}になつてくれという掛合^{かあひ}になつた。

さすがの扇朝もおどろいた。だが、考えたのに、自分もこれから東京へかへつたところてしかたがない。師匠に詫^わひをいれるのも業腹だ。詫^わひをいれて、もしその詫^わびがきかれなかつたらそれつきりだ。よしんはすく詫^わびかかなくなつたところで、これからのまだ修行という奴がある。これからの修行がほんとの修行。

だが、苦勞して、首尾よくその修行をつんで、一人前の芸人になつたところでそれが何になる。よし三代目梅橋になつたところで多寡^{たが}が知れている。世の中は堅気のことだ。堅気にかぎる。ふとこう扇朝は発心した。そうして、生まれながらの前^{まへ}にいうのをわすれたが、もともと扇朝の親というのか田舎^{いなか}まわりの講釈師^{こうしゃくし}だつた。芸人の足を綺麗^{きれい}さつぱり洗うことにした。

金はある、娘は惚^ほれてゐる、いう目はなんでも出る。扇朝にとってそれは何にもいうところのない月日だつたものの、二年たち、三年たちするうち、だんだん、

扇朝にはその生活が退屈^{たいくつ}になつて来た。堅気といふものは思つていたほどいいものではなかった。

祭礼^{まつり}とかなんとか、何か機会^{きかい}があるごとに、扇朝はときどき以前の梅橋の弟子にかへつた。せめてものそれが慰藉^{なぐさめ}だつた。だが、それがだんだん病みつきになり、そのうちには、道楽半分、たのまれて近間の寄席や芝居に出るようになった。そうなると当年の別ビラの真打・

周田^{しゅうでん}が捨てておかなかつた。じきにすなわち扇朝は、五里六里さきまで始終出つ張らなければならなくなつた。

川^{かわ}たちは川に果てる。やつぱり、しかたのないものだつた。それから三年たつたとき、扇朝は五六人の一座をつれて、旅から旅をまた廻^{まわ}つてあるく不幸な芸人になつていた。そうして、それからまた五年たつたときには、田舎まわりのある女役者の、亭主^{ていしゅ}のような男妾^{おとこめかけ}のようなものになつていた。同時に、中村なにがしという芸名を持つ三枚目専門の若い役者だつた。

二十三の夏から二十七の冬までその女役者と一しよに暮した。大切にされるまま、はじめのうちは何とも思わなかつたが、そのうちにまただんだんその境涯^{きやうがい}に満足が出来なくなつて来た。勝浦に置きざりにして来た娘のことが思ひ出された。何だか知らないがやたらに東京が恋しくなつた。といつて、扇朝は、思ひきつて、その女から離れることも出来なかつた。扇朝よ

りも女の方が年をとっていた。扇朝は目に見えぬ力にひきずられなから生きていたかたちがあった。

と、明けて二十八の春、常陸へ興行へ行ったときだった。狂言は「加賀見山」の通しで、その女はおはつ、扇朝の役は「烏啼」の提灯奴だった。土地の人氣に

かなって芝居は大へんな景氣。「烏啼」の幕があい

て、いつものように、扇朝が、揚幕からおはつの足もとに提灯をみせながら出て来ると、だしぬけに、土間から「腰抜けが。亭主のくせにかかあの提灯もちをしていやあがる。」と大きな声で怒鳴られた。

扇朝はもう少しで提灯を抛り出すところだった。何ともいえず、

さびしい、心細い氣になった。楽屋へ入ると、書置を書いて、そのまま芝居を飛び出した。そうして、その日のうちに東京へかえった。

だが、東京へ帰ったものの、帰ってみると、十年の間に世の中はまるつきりかわっていた。たのみに思う師匠の梅橋はもうあの世の人になっていた。まえに蕪路といっていた奴が蕪橋となり、梅橋にかわって組合の牛耳をとり、そうして梅橋の名跡、扇朝がつくかも知れなかった。は、その蕪橋の弟子の、扇朝もろくに知らないような人間が継いでいた。

いまさら蕪橋のところをたよるのは業腹だった。といって、そうするのが真実ではあるけれど、今度の三代目

梅橋をたよることはなおのこと出来なかった。扇朝

はそこで浜町の不動新道に初代柳朝をたずねた。そうして改めて柳朝の弟子になった。

柳朝は師匠の梅橋でさえつねに推服していたほどの人情師の名人だった。

扇朝は、身にしみて稽古した。いままでの道草をとりかえすために骨身を惜しまず稽古した。柳朝もその才分をみとめて特に肩を入れてくれた。

だが、一年たつかたないうちに、扇朝は、そのあたらしい師匠に死にわかれた。改めて、ゆくゆくその

二代目になるべき若い師匠の柳橋の手についていると、一年たたないうち、そのまた若い師匠も煩いついた、そうして間もなく大きい師匠のあとを追った。

柳朝の畑のものはもう痛ましいかぎりだった。

それに引きかえて、蕪橋は、「蔵前の大師匠」の名がいよいよ高くなるはかりだった。ひいて蕪橋の手のものてなければ夜も日もあけない有様だった。蕪橋の部屋のものてなければどこの寄席でもいい顔をしなかった。ここにいたって扇朝は、まったくのこと、だれにも相手にしてもらえない不幸な人間だった。

辛抱に辛抱をした。出来るだけの辛抱はした。だが、扇朝は、どうにかしなければその日のことに事を欠くのだった。

誰に相談するようもなく、それには自棄も手伝って、みずから扇朝は浪花節の仲間ななわしに身を落した。て、ちようど七年、そのなかで暮した。

取るものもとれば、手厚くもされ、大抵な我儘わがままでも通してくれるけれど、取るものがとればとれるほど、手厚くされればされるほど、我儘を通してくれればくれるほど、それがかえって苦患くげんだった。さすがに扇朝も、その境遇に安住しきることは出来なかった。

「蔵前の大師匠」が死に、つづいて三代目梅橋も死んだ。世の中の形勢はうごきかけた。

四代目梅橋が出来た。三代目と違って、四代目は、師匠の二代目に由縁ゆかりのあるものだった。

扇朝はすぐそこへ馳けつけた。

その四代目の心配で、扇朝はふたたび組合のなかにかえることが出来た。梅枝という名前なで、改めてまた四代目附きの人間になった。

ちようど、そのとき、扇朝は三十九だった。

それから十年。はじめのうちは、柳朝うつしの人情噺のたんねんなところが評判になったが、年々としとしに後から後からと、若い、元気のいい連中は出て来る。い

くら負けない気でも「時代」のかわってくることはどうにもならなかった。・それには全体四代目という人に八気がなかった。ウダノのあがろう道理がない。：

だんだん扇朝は売れなくなるはかりだった。

見かねて、梅橋が、自分から発企になり、真打たちにたのんで、扇朝のために上野の鈴木で演芸会を開いた。そうして上りを扇朝に養老金としておくった。：それを貰って扇朝は、寄席を退いた。

この演芸会について上野の師匠が大へん力をいれてくれた。そればかりでなく、そのあとでまた扇朝のためにとくに独演会をやってくれた。そうしてその上りをすへて扇朝の所有にした。

いつもながら上野の師匠は同情が深かった。

話がくだくだしくなったけれど、せん枝が「彼奴は義理を知らない。」というのはここだった。とにかく、これだけのことをしてもらいながら、扇朝はあとで、上野の師匠のところへ顔出しさえしなかった。

何といわれてもしかたのないことだった。「ふざけていやがる。」「師匠を何と思っていやあがるんだ。」と、師匠思いの上野の弟子たちはみんな腹を立てた。

ことに、そういうことになる、どこまでも、堅気な、几帳面きちめんなせん枝だ。それまでは、眼が不自由になってからも、ときどき手もとに呼んで、柳朝うつしの噺の稽古をしていたのを、それ以来、ピタリと扇朝の出入りをとめた。

「あんな腸はらわたの腐った奴。」

せん枝はこういった。・　こういつて飽くまでも憎んだ。

去年のちょうど暮の話。　だか、扇朝にしてみると、扇朝にはまた扇朝の理屈があるのだった。

今年は十月になつてもなお残暑が強かった。日のいろ
かいつまでも濃くあかるかった。・と、ある日の夕方
から降り出した雨が、あくる日になつてもやまず、どう
やらそれは暴模様のようにもなつた。　再び晴れた青
空をみる事が出来たとき、その青空のいろがもう水の
ように澄み尽していた。そうして、身にしみて冷めたい
風がふいた。

「有難い。　助かった。」

せん枝は真実に蘇生つたように思った。・　眼の不自
由なものにとつて、暑いほど、辛い、苦しいものはな
かつた。

九月のせん枝会に出てもらった礼もあり、かたがた、
半年ぶりほどで、せん枝は上野の師匠のところへてかけ
た。そのかえりに、山下から広小路の方へ出るように
俣夫にいつて、気の向いたまま、新堀の、三橋のところ
を驚かした。

昨夜出て、三橋はそのすこし前にかえつたところだつ
た。・湯に行つて来て、ちようどいま一杯ははじめよう

としたところだった。

「　そうかい、上野のかえりかい。　でも、よく寄
つてくれた。」

三橋は、土間に下りて、せん枝の体を格子のなかに抱
き入れた。

「二階がいい。」といつて、そのまま、二階へまたつれ
て上つた。

「ちようど好かつた。　実は俺もいまかえつて来たところ
だ。」わざと声を低くしていった。

「多分そんなことだろうと思つたよ。」せん枝は笑つて、
「全体このごろはどこを稼いでいるんだ。」

「紫陽花は、浮気する人、意見の花よ、つていう都々逸
を知っているかい。」

「厭な奴だ。」せん枝はいつた。「道理で、このごろ、山
谷までよく用たしに来ると思つたよ。」

「まわり廻つてもとの色さ。　分つたかい。」三橋は
こういつて笑つた。

去年の春、すこし面白くないことがあつて弟とわかれ、
夫婦でべつにいまの金竜山下瓦町、今戸橋のそばの河
岸に世帯を持つてから、一年半ばかりの間、三橋はあと
にもさきにもただの一度　それもせん枝が煩つてい
るときに　しか出て来なかつた。せん枝の顔を見ると
つも「新さん、済まない、そのうちにきつと行くよ。」

といったけれど、そういうばかりで、やつぱり出て来なかつた。用がある、女房を代りによこした。：それ

ほど無精な人間が、夏からこっちどうした風の吹きまわしか、そういうてもしげしげ顔をみせるようになった。

「山谷まで用たしに來たから寄つたよ。」と、いつもキマリでそういうった。

「新ちゃんに一度逢いたいといつてるぜ。」と、三橋は言葉を継いだ。

「誰が。」

「誰がつて分つてゐるじゃないか、手前どものがさ。」

「手前どもの。・ どうして手前どものが俺を知つてゐる。」

「信夫さんのところの新ちゃん。・ こういつたら分るだろう。」

「古いことをいいだしたぜ。」せん枝は苦笑いをして、「だけど、そういうたつて、まさかにあの雲井さんの華魁でもあるまいが。」

「ところがその雲井さんの華魁だからおかしいだろう。」

「どうして。でも、あの女は、その後、落籍されるかどうかしてゐなくなつたんじゃないか。」

「いなくなつた。ところが、それがまた、この春、吉原へかえて來たんだからおかしいだろう。」

「三橋師匠が恋しくなつたとしてもいいのかい。」

「それがね、いろいろそこには深い事情があつてね。：聞いてみれば可哀そうな身の上さ。」

「定文句をいつてゐるぜ。」せん枝はいつた。「相変らず女にかけるとダランがないんだな。」

「ダランがないはないだろう。」

こういつて何の屈託もないように三橋は笑つた。

せん枝は三橋がうらやましかつた。それはもう十年も前のこと、死んだ柏枝が先達で、三橋とせん枝は始終間さえあれば吉原へ出かけていた。毎晩寄席で顔を合

わして：弟子師匠の關係はなかつたが、柏枝も三橋も、やつぱり上野の師匠の手の人間だつた。席割を握む

と、三人はそのままわかれることが出来なかつた。電車のなくなる時分までどこかしらで飲んでゐた。そうして

あげくは大い家へかえらなかつた。・ 雨てもふつたり雪ても降つたりすることとにそうだつた。

京町のある古いと固いで通つた見世。：柏枝はそこ

のお職の吉野という女のところへ三年というもの通いつづけた。三橋の馴染みは雲井という女、せん枝の馴染み

は信夫という女だつた。柏枝でも三橋でもせん枝でも、いまからはとても考えられないほどトゾトボして

いた。随分ときには無理なことまでして女のところへ運んだ。いろいろそこにはおかしいこともあれば悲しい

こともあつた。

その柏枝は気が狂つて死んだ。死ぬ間際まで柏枝はその吉野の名を忘れなかった。

三橋は柏枝のいなくなる時分からだんだん売り出した。江戸前ノノカリした芸が評判になって、いまでは「柳」で屈指の人気役者になった。

同時にいよいよ道楽者になった。その間にせん枝は眼が重くなった。寄席へ出ることが出来なくなった。・ 去年の夏、鈴むらさんの心尽しで、「せん枝会」というものが出来、いよいよ他人にたよって行かなければならなくなったとき、せん枝の来しかたは暗い苦悩と悲痛とに満たされていた。

だが、せん枝は強情だった。負けない氣だった。女々しいことはきらいだった。

「どうなるものか。」せん枝はこう思った。飽くまで多寡をくくった。今まで通り誰とでもつきあえば、今まで通り酒も深く飲んだ。そうして、今までよりも嵩にかかつて熱心に噺の稽古もした。だが、そばからその心もちは潰えて行つた。そういつてもだんだん人間にイタナがなくなつた。

「くだらない。どうしたというんだらう。」

無理から自分を抑圧えようとすると、そうしようとすればするほど、何ともいえない、便りない、心細い心もちが胸の底から湧いた。「せん枝会」の末始終、自分の末始終。……そういつたことがつぎつぎとわけもなく思

われた。

ことにこのごろそれが酷くなった。

「どうしたい、新さん。心もちでも悪いのかい。」せん枝のなんとなし浮かない顔のいろをみて三橋はいつた。

「何、どうもしやしない。」せん枝はいつた。「久しぶりで外へ出て、すこしオノヤリしたからさ。」

「そうかい、それならいいけれど。」三橋は銚子をとつて、「どうだい、熱い奴を一つつごうじゃないか。」

「貰おう。」

せん枝はチャブ台のうえのコノブを手さぐりにとり上げた。

「何だか知らないが、莫迦に今日は酒のきくような氣がするよ。」

そういいながら三橋は自分の盃のなかも一杯にした。「好い陽氣になったから。これからまただんだん酒がうまくなる。」せん枝もいつた。「それはそうと、この

間の日曜の立花の独演会は莫迦な景氣だったというじゃないか。」

「誰がそんなことをいつた。」

「衆公が来てそういつていた。」

「駄目さ、二百来ないんだから。」三橋はいつた。「あの日はまた悪い日て、若竹に上野の師匠の独演会、末広に